

が早い第一期一巻は、口演童話家で幼児教育などに携わった岸辺福雄の『お伽噺仕方の理論と実際』（明治42年）で、これは口演童話の効用や方法について論じたものだった。従って、蘆屋の『教育的応用を主としたる童話の研究』が、

日本の児童文学研究書の嚆矢とされる。蘆屋は、明治期の児童文学をリードした巖谷小波系の人々たちを中心とし、明治45年に発足した少年文学研究会のメンバーだった。この会が、日本初の本格的な児童文学研究組織だったといえる。

さて、大正期となると、『赤い鳥』に代表される童心主義の童話・童謡というイメージが浮かぶが、これらは「童心主義」という主張のもとにそうした創作活動が展開されたというよりも、当時の思潮・傾向というべきもので、「童心主義」を標榜する理論的リーダーがいたというわけではない。従って、というか、復刻版では、野口雨情『童謡十講』（大正12年）、西條八十『現代童謡講話』（大正13年）、そして北原白秋の童謡論集『緑の触角』（昭和4年）といった、当時の代表的詩人たちの著書を取り上げている。こうした中で注目されるのは、尾関岩一『童心芸術概論』（昭和7年）

で、この本は、前記の蘆屋重常が中心になって大正11年に発足した日本童話協会の機関誌『童話研究』に、昭和6年4月号からほぼ一年間連載されたものを元にしていて。前記の上論文では、「尾関のこの一冊は、〈児童中心〉をつらぬく立場と成人の深奥に潜在する〈童心〉」とを統一的にと

らえようところみだ児童文学論として、記念碑的な意味を持つている」と評されているが、尾関は東京の児童文学界との交渉が必ずしも強くなかったこともあつてか、この本が同時代の書き手たちに多く読まれ、影響力を発揮したとは思にくい。

さて、一方この時期は、折から勃興したプロレタリア文学運動の児童版としてのプロレタリア児童文学の動きが活発になっていった。これを理論的にリードしたのが楨本楠郎（一八九八―一九五六）だった。復刻版では、彼の第一評論集である『プロレタリア児童文学の諸問題』（昭和5年）が採られている。童話・童謡の童心主義を強く批判し、（大人に対するプロレタリア作家は無数に群起しつつあるが、彼等プロレタリア児童の為にペンを取って起とうという者は殆ど見当たらずではないか）と、階級的な視点を明確にした児童文学の創造を訴えた楨本は、日本で最初の本格的な児童文学評論家だったといえる。しかし、時の権力の激しい弾圧に遭って、プロレタリア児童文学は変質、敗退を余儀なくされていく。

そして、戦後になって、こうした問題意識を受け継ぎ、新しい時代に対応する「民主主義（的）児童文学」の創造を呼びかけたのは、菅忠道（一九〇九―一九七九）と国分一太郎（一九一―一九八五）であった。菅は日本の児童文学研究史でほぼ初めてといえる児童文学通史『日本の児